

BOOK

April 1987 Volume 85

創刊7周年記念特大号
特別定価
490yen

4

住宅特集

頭脳刺激空間 のつくり方

今日も早くわが家に帰りたい

柏木博
布井育夫
秋岡芳夫
井上昇
浜野安ム
森瑤子
佐貫亦男

タイプ別書籍

頭とカラダの
「エクササイズ
探索術」

崖でも軟弱地盤でも
家は建つ
常識破りの住宅入手法

家のサイズ白書

アートするマンション/松葉一清

気になる建築家の
スペース発想法/植田実



1.

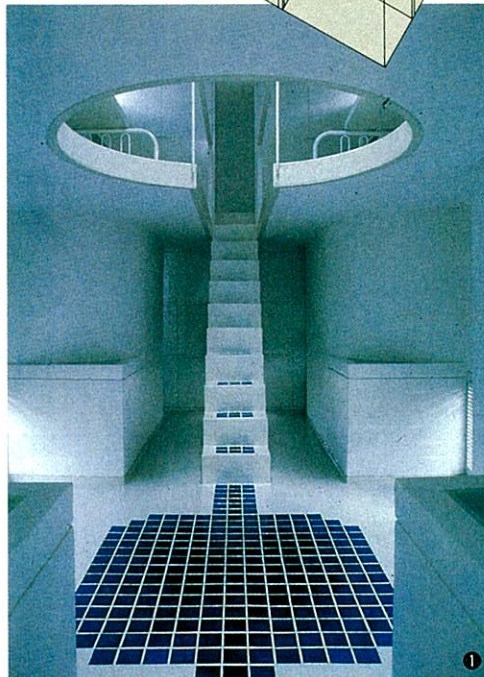
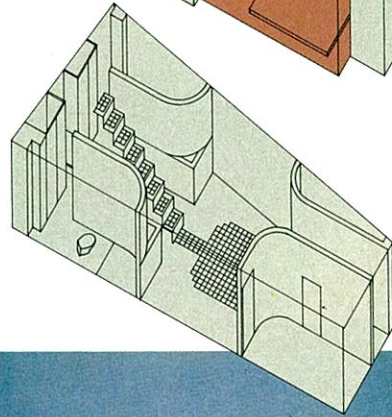
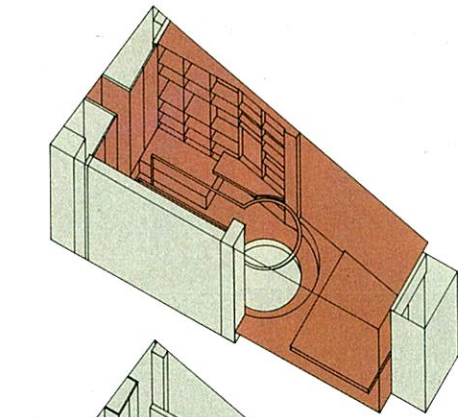
建築家の自邸

「こんな夢だ」と諦めてはいけない。この宇宙船もどきの空間は、わずか坪32万円のローコスト書斎。

沖縄県浦添市。県道に面した喫茶店の上。不整形のうえ9坪しかないが、若い建築家のカップルはこの「敷地」に新居をつかった。アパートを借りるのとほぼ同じ値段で実現した。

この増築部分は、上下階をあわせて57平方メートルというかわいらしさだが、このなかにも強引なまでの形式性を貫いているのがユニークだ。玄関から階段までを一直線に結び、その中心にホールをとり、階段の裏に食卓を置き、四つの部屋を四隅に配し、ホールの真上を円形の吹き抜けにしている。

2階で、吹き抜けをはさんで、2人それぞれの本棚・机・ベッドをワンセットにした個室のコーナーをつくったあたりに、この形式性の強い住まいのおもしろさがよく出ている。吹き抜けをふさげば普通の寝室になる程度の広さだが、こうした最小限の空間が、寝と食・遊びと仕事が一体となった合切袋と化すことを避けている。至るところ最小寸法で決定することで、狭さを逆手にとった「非日常空間」を得ようとする試み。友人知人たちは6畳そこそこの玄関ホールとも居間ともつかないタイル貼りの床に座りこんで、長話。建築現場から家に帰っても、仕事に追われているときは、福村さんの机は製図板になる。建築家の自邸の焦点は、やはりこのあたりだろう。



Photographs・Fukumura Shunji

なんとといっても、日々追われているのは、原稿のほうはいくほどの依頼はないが、刻々と増えていく本と雑誌とその他諸々の資料への対応である。利口な整理学とは、思い切りよく捨てていくことが第一のようだが、捨てられない。古本屋に持っていくこともできない。本の形になつたものはまだいいとして、郵便物やパンフレット、会議のペーパーの類はもう整理したらいいのだから。手紙は小学生の頃のものから年代順に箱にしまって、天井の梁の上のせて格好がついているが、細かなものは既製品の本型ボックス型、アコーディオン型や引き出し型のファイルに頼らざるを得ない。となると、部屋の一部が事務所さくさくなつ

てあまり嬉しくない。書斎らしければいいということでもない。というより、建築関係と文科系と漫画類とスライドのファイルがそれぞれ同じくらいの物量で陣取り合戦をやっているのだが、うまく行けば、何だか分からないが、規格に合わない面白い部屋になりそうなのもある。そんな部屋の膨張を黙って見過ごしている、大きくなりすぎたアリスのように、家そのものを壊してしまう羽目にもなりかねないが。

レクションが、ひとりの人間が生涯に見ることのできた果てしない大きさのヴィジョンのような迫力で、延々とスクリーンに映し出されていた。何もやっていないわが身でも、書くこと以前に、自分の世界幻想を部屋のなかに引き入れた物によって語っておきたい。品のいい書斎を残して死ぬなんていやだ、というような気持ちの頭の中にあるのかな。

台所のマナ板を「机」にしてきた老先生

身近なところでは、建築界の最長老であるI先生のお宅の様子をお弟子さんから聞いたことがあるのだが、夫人に先立たれ、90歳を越してひとり暮らしをされている先生は、やはり紙切れ一枚も大事にされる方で、玄関を入ったところから本や書類の山で、廊下もどの部屋も同じように埋めつくされているという。けもの道みたいに本のなかにやっとな歩ける隙間があって、その道は台所に続いている。台所も空いている場所などまるでなく、たった一か所、流しの横に置いてあるマナ板が、現在の先生の「机」だ。と。

を帯びてきた。おそらくは創造的頭脳の巣のような様相を呈しているその住まいは、もともと人間の住宅にふさわしい気がする。I先生は、最近健康がすぐれないので、実際に訪ねることができないのが残念だが、本の重さで木造の家が崩壊寸前だったという、故植草甚一氏のお宅にも、一度は遊びに寄ってみたい。こちらが建築関係の人間だと知ると、即座に、戦後まもなく美術出版社から翻訳が出た、ル・コルビュジエの『モデューロール』の正方形の造本デザインがいかにか斬新であったかを、目の前にその本をとり出すような克明な描写で話してくれて、それは植草氏の住まいの書棚の光景が彷彿する

- 1 この家の各部屋には扉がない。つまり2フロア全体がワンルームで、中央のホールによって結ばれている。
- 2 最上階から見たホール。このホールは美的なだけではなく、南面沖繩にあつてクーラー不要の、天然エアコン機能を備えている。
- 3 9坪の土地に建ち、1階が喫茶店、2、3階が福村さんの居住部
- 4 最小寸法の書斎だが福村さんによれば「体が家に合っている」。

福村俊治

ふくむら しゅんじ
1953年志賀県生まれ。77年、関西大学建築学科を卒業。同大学院修士課程修了後、海外を建築旅行する。82年、アトリエ・ファイ建築研究所入所。現在、那覇市城西小学校担当として沖縄(那覇)・21沖縄県浦添市仲間715-2に在住。

